



第18回

ショパン国際ピアノ・コンクール2021
優勝者リサイタル

ブルース・リウ
ピアノ・リサイタル

18th CHOPIN COMPETITION WARSAW
Winner's Recital

Bruce Liu
Piano Recital

2021年11月11日(木) 19時開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Thursday, November 11, 2021,
at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

協賛： **MEDIHEAL**
BEAUTY SCIENCE

後援：駐日ポーランド共和国大使館 / ポーランド広報文化センター / カナダ大使館



オール・ショパン・プログラム All Chopin Program

夜想曲 第7番 嬰ハ短調 Op.27-1
Nocturne No.7 in C-sharp minor, Op.27-1

スケルツォ 第4番 ホ長調 Op.54
Scherzo No.4 in E major, Op.54

バラード 第2番 ヘ長調 Op.38
Ballade No.2 in F major Op.38

アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22
Andante spianato and Grandepolonaise Brillante Op.22

* * *

4つのマズルカ Op.33
4 Mazurkas Op.33

第1番 嬰ト短調	No.1 in G-sharp minor
第2番 ニ長調	No.2 in D major
第3番 ハ長調	No.3 in C major
第4番 ロ短調	No.4 in B minor

ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調「葬送」Op.35
Piano Sonata No.2 in B-Flat minor Op.35

第1楽章 グラーヴェー ドッピオ・モヴィメント	1st mov.: Grave - Doppio movimento
第2楽章 スケルツォ	2nd mov.: Scherzo
第3楽章 葬送行進曲：レント	3rd mov.: Marche funebre: Lento
第4楽章 フィナーレ：プレスト	4th mov.: Finale: Presto

モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の「お手をどうぞ」による変奏曲 変ロ長調 Op.2
Variations on La ci darem from Mozart's Don Giovanni, Op.2



ブルース・リウ (ピアノ)

Bruce Liu, Piano [カナダ]

第18回ショパン国際ピアノ・コンクール2021 第1位

1997年パリ生まれ。モントリオール・コンセルヴァトワールでリチャード・レイモンドに師事し卒業、現在はダン・タイ・ソンに師事している。クリーヴランド管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、モントリオール交響楽団、オーケストラ・オブ・ジ・アメリカズなどの主要オーケストラと共演しており、中国国家大劇院管弦楽団とは北米ツアーを行った。最近のシーズンには、ウクライナ国立交響楽団、リヴィウ・フィルハーモニー管弦楽団と連続する二度の中国ツアー（中国国家大劇院、北京音楽庁、上海東方芸術センターなどへの出演を含む）を行ったほか、サル・ガヴォーでラムルー管弦楽団とも共演。仙台、モントリオール、テル・アヴィヴ、ヴィセウの国際コンクールで入賞している。

Born in 1997 in Paris, he graduated from the Montreal Conservatoire under Richard Raymond and is currently a student of Dang Thai Son. He has performed with major ensembles including the Cleveland Orchestra, Israeli Philharmonic Orchestra, Montreal Symphony Orchestra and Orchestra of the Americas, and has toured with the China NCPA Orchestra in North America. Recent seasons have brought two successive tours of China with the National Symphony Orchestra of Ukraine and the Lviv Philharmonic Orchestra (including appearances at the National Centre for the Performing Arts, Beijing Concert Hall and Shanghai Oriental Arts Centre), and the Orchestre Lamoureux at Salle Gaveau. He has won prizes at international piano competitions in Sendai, Montreal, Tel Aviv and Viseu.



PROGRAM NOTES

道下京子 (音楽評論家)
Kyoko Michishita

ショパン国際ピアノコンクールを通して、ブルース・リウさんの名前を初めて知った人も少なくないと思います。リウさんは、第6回仙台国際音楽コンクールで第4位を受賞。筆者はそのファイナルの演奏を仙台で聴き、同コンクールのニューズレターに、「その音楽には気品が備わっており、豊かな将来性を感じさせた」と紹介しました。それから5年を経て、ワルシャワの舞台上で個性豊かな音楽家へと大きく成長を遂げた姿に接し、とても頼もしく思いました。演奏技巧や音楽性にさらに磨きかけられ、とりわけショパンの声に耳を澄まし、その音楽の精髓をひたむきに追い求め、鮮烈かつ音楽の内実がひととき豊かになった印象を持ちました。

ワルシャワのコンクールが閉幕して3週間…その地でリウさんが演奏したショパン作品を、東京で聴くことができるのは、この上ない喜びです。

フレデリック・ショパン(1810～49)は、ワルシャワ音楽院に学んだのち、ウィーンでの活動のために1830年秋にポーランドを発つ。しかし、ワルシャワ蜂起の影響で、ポーランド人のショパンは活動の制約を受け、翌年7月にウィーンを離れ、10月からパリで生活を始めた。サロン文化の華やぐこの町で、1836年にジョルジュ・サンドと知り合い、やがて二人は恋に落ちる。1838年秋、ショパンは彼女とマヨルカ島へ渡るも、4か月の滞在ののちにフランスへ戻り、ノアンにあるサンドの別荘で創作に打ち込む日々を送った。1847年にサンドとの関係を解消。晩年は肺の病が進行し、39歳で帰らぬ人となった。

フレデリック・ショパン

夜想曲 第7番 嬰ハ短調 Op.27-1

ノクターン(夜想曲)を創始したのは、アイルランドの作曲家ジョン・フィールドである。分散和音の波の上で、歌曲のようなメロディが奏でられるフィールドのノクターンに、学生時代のショパンは深い感銘を受けたと伝えられている。

1833～36年に作曲された第7番は、ほの暗い情熱を内包するようなノクターンである。低音部における六連符の分散和音は、主部の音楽の流れを担う。中間部はドラマティックな楽想で、主部とは対照的である。

スケルツォ 第4番 ホ長調 Op.54

スケルツォは、ベートーヴェン以降の交響曲やソナタの中間楽章に、メヌエットに代わって使われた。「冗談」の意味を持ち、諧謔的な楽想のスケルツォを、ショパンはピアノ音楽に用いた。

ショパンは作曲した4曲のスケルツォのうち、第4番は唯一の長調によるスケルツォで、1842年に完成した。コラールのような趣のスケルツォ主題に始まり、弾みながら上行する和音の運動や、急速なパッセージなどが繰り返される。作品全体に軽やかな情趣に満ちており、嬰ハ短調の中間部においても沈むような重々しさはない。

バラード 第2番 ヘ長調 Op.38

古くは詩のジャンルであったバラードは、中世では声楽作品として作曲され、ロマン派の時代には民話調の歌曲として広く作曲された。ピアノ音楽にバラードという名称を初めて用いたのは、ショパンであると言われている。

ショパンは4曲のバラードを作曲した。第2番のバラードは1836年に書き上げられるも、その後手を加えられ、1839年に完成した。シチリアーノのリズムによる穏やかなアンダンティーノと、なだれ落ちるような激しいパッセージを含む部分が交互に置かれている。シューマンから《クライスレリアーナ》を捧げられたショパンは、返礼としてこのバラードを彼に献呈した。

アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22

ショパンのピアノとオーケストラのための作品は、ポーランド時代からウィーン滞在中に作曲された。「華麗なる大ポロネーズ」は本来、オーケストラとピアノのための作品で、彼がウィーンを離れる前の1831年7月に完成した。そのポロネーズの序奏として、ピアノ独奏による「アンダンテ・スピアナート」が1835年に書き上げられた。流麗で清々しいアンダンテ・スピアナートと、澁刺としたポロネーズとの対比が魅力である。ポロネーズの部分は、のちにショパンによってピアノ独奏版が編まれた。

4つのマズルカ Op.33

マズルカは、マゾフシェ地方のマズールやロンスク地方のオベレック、そしてクヤヴィ地方のクヤヴィアクなどの総称。1曲のマズルカのなかで、さまざまな民俗舞曲のリズムが複合的に取り入れられている。《4つのマズルカ》作品33は、1836年から38年に作曲された。マズールのリズムが醸す悲しげな情感が印象的な第1番(嬰ト短調)、第2番(ニ長調)では、主部の冒頭はオベレック、ハ長調の中間部はマズールのリズムに彩られている。第3番(ハ長調)は、ポリフォニックな書法の主部ののちには変イ長調の軽快な中間部が続く。第4番(ロ短調)の主旋律には、マズールとともにオベレックのリズムも用いられている。

ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調「葬送」 Op.35

ショパンは3曲のピアノ・ソナタを残している。学生時代に作曲した第1番と比べ、第2番は独創的であり、まさにロマン主義の時代の新しいソナタの世界を開拓したと言ってもよい。このソナタは、1837年に完成した「葬送行進曲」(第3楽章)を軸としている。第1楽章はソナタ形式に基づいているが、第2主題で再現部が始まるなど、独自の試みが見られる。第2楽章では、重苦しい連打がさらに死の淵へといざなう。このソナタの中心をなす第3楽章「葬送行進曲」に続き、第4楽章では、囁くようにユニゾンが奏でられる。

モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の「お手をどうぞ」による変奏曲 変ロ長調 Op.2

この変奏曲は、ショパンがワルシャワ音楽院在学中の1827年あるいは28年に作曲された。のちにシューマンは、「諸君、脱帽したまえ、ここに天才がいる」とこの曲を絶賛している。モーツァルトの《オペラ「ドン・ジョヴァンニ」》のなかのアリア「奥様、お手をどうぞ」を主題とし、主題の前には序奏が置かれている。主題の後には6つの変奏が続き、6つ目の変奏にはポロネーズが取り入れられている。この変奏曲の作曲で経験したオーケストラの表現は、彼のピアノ協奏曲の創作にも取り入れられた。